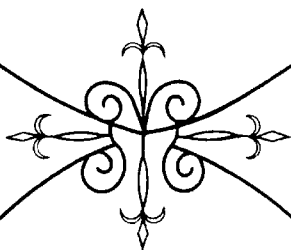


# 三島由紀夫全集



## 補卷1

口述筆記

講 演

談 話

對談 鼎談

他

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳  
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

I313. 15  
J98-36

© 1976. Tatsuo Funabashi, Tetsutarō I  
Shōhei Ōoka, Hiroshi Akutagawa, Hideo  
Mitsuo Nakamura, Hideko Kawabata, Tsuneari Fuku-  
da, Kenzaburō Ōe, Sadako Itō, Shūgo Honda, Mari  
Mori, Kōbō Abe, Susumu Akiyama, Yutaka Haniya,  
Takeshi Muramatsu, Kenkichi Yamamoto, Shōichi Sa-  
eki, Shintarō Ishihara, Kazuko Takahashi, Akiyuki  
Nosaka, Jin-ichi Konishi, Donald Keene, Taijun  
Takeda, Jun Ishikawa, Takashi Furubayashi, Takao  
Tokuoka and Tennessee Williams  
Tokyo Japan

本文印刷 株式会社精興社  
口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社  
付録印刷 株式会社精興社  
口絵製版 株式会社学術写真製版所  
製本 大口製本印刷株式会社  
製函 日本紙バルブ商事株式会社  
本文用紙 特瀬上質紙・三菱製紙株式会社  
皮革 靱井皮革株式会社  
表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商会  
扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社  
見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社  
函用紙 Sペラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集 補卷Ⅰ 目次

## 口述筆記

新戀愛講座……………九

わが思春期……………九二

「日本的な」お正月……………一四〇

自衛隊二分論……………一四七

同志の心情と非情——同志感と團結心

の最後の表章の考察……………一五〇

女の色氣と男の色氣……………一五八

わが同志觀……………一六六

## 講演

日本文壇の現状と西洋文學との關係

——ミシガン大學における講演……………一七三

## 談話

僕に託した「娘時代の夢」——母を語る……………一八〇

文學者と速記……………一八〇

私の見合結婚……………一八二

母を語る——私の最上の讀者……………一八七

榮譽の絆でつなげ菊と刀……………二〇八

## 對談・鼎談

舟橋聖一との對話〔舟橋聖一〕……………二一九

創作批評〔河上徹太郎〕……………二二九

犬猿問答——自作の祕密を繞つて〔大岡

昇平〕……………二五〇

演劇と文學〔芥川比呂志〕……………二六九

美のかたち——「金閣寺」をめぐるつて

〔小林秀雄〕……………二八五

劇作家のみたニッポン〔テネシー・ウィリ

アムズ〕……………三〇五

川端康成氏に聞く〔川端康成・中村光夫〕……………三八

歌舞伎滅亡論是非〔福田恆存〕……………三九

現代作家はかく考へる〔大江健三郎〕	三九
戦後の日本文学〔伊藤整・本多秋五〕	三七
父・森林太郎〔森茉莉〕	三九
二十世紀の文学〔安部公房〕	四〇七
私の文学を語る〔秋山駿〕	四二
デカダンス意識と生死観〔壇谷雄高・村松剛〕	四七六
原型と現代小説〔山本健吉・佐伯彰一〕	五〇三
守るべきものの価値——われわれは何を選択するか〔石原慎太郎〕	五五二
大いなる過渡期の論理——行動する作家の思辨と責任〔高橋和巳〕	五二
剣か花か——七〇年亂世・男の生きる道〔野坂昭如〕	五九
世阿彌の築いた世界〔小西基一・ドナルド・キーン〕	六〇五
文学は空虚か〔武田泰淳〕	六三

破裂のために集中する〔石川淳〕	六五四
三島由紀夫 最後の言葉〔古林尚〕	六九
インタビュアー	
インドの印象〔インタビュアー・徳岡孝夫〕	七三
アンケート	
三島由紀夫氏への質問	七三
解題	七七
校訂にかえて	七六
年譜	七三
著書目録	七五九
索引	八二七



三島由紀夫全集 補卷 1





口  
述  
筆  
記



新戀愛講座

第一講 西洋の戀愛と日本の戀愛

われわれが、ただ戀愛といつてゐるものも實はほんたうに、われわれの本能から出て男が女を愛し、女が男を愛するといふふうには、まるで動物が引き合ふやうに愛してゐるのではないので、人間の戀愛は動物の戀愛と違つて、みな歴史、社會、環境、いろいろなものに制約されてゐるわけです。われわれが一つ戀愛すると、その戀愛の中に全人類の歴史、全人類の文化が反映してゐるのです。これは、われわれといふ存在が、ちやうど歴史の一端に大ぜいの先祖と、大ぜいの文化の趨勢の上に生まれてきたのと同じに、今あなたないし私のする戀愛も、決してひとりであるで天から落ちかかつてくる隕石のやうに、戀愛が始まるといふものではなく、みな何ものかに規約されてゐるといふことができます。私は、今こゝで戀愛をギリシアの戀愛とキリスト教の戀愛と、

日本の戀愛の三つに大別してお話ししませう。

だいたい、西洋人の戀愛は初めの二つがいろいろかみ合つて出てきてゐるのですが、われわれが、西洋の小説を讀んだり、西洋の映畫を見たり、いろいろな點で西洋の文化の影響を受けてゐる今日では、われわれの戀愛の中にも、さういふ戀愛觀念がずいぶん入つてゐます。そもそも、戀愛といふ言葉そのものが、英語のラブの翻譯ですし、そのラブの中には西洋の戀愛の觀念がはつきり入つてゐて、日本の戀愛とはやはり違ふものです。

ギリシアの戀愛は、キリスト教が出てこない前の戀愛で、プラトンの「饗宴」といふ哲學の本にこれがはつきり書かれてゐます。プラトンは、「饗宴」で戀愛といふのはやはり美しいものに對して、われわれの心がひかれることだといつてゐます。ギリシアの當時では、ちよつと妙なことです。ほとんど男女の戀愛といふものはなかつたのです。男と交はる女は、みな娼婦でした。中には教養の高いものもましたが、とにかく娼婦が多かつたので、それとの間にはあまり戀愛は論じられず、遊びでありました。そして、普通の結婚はすべて子孫の存續のために結

婚したので、戀愛から結婚したわけではありません。ギリシアの戀愛とは今でいふ同性愛で、美少年との戀愛であります。ですから、プラトンの美しいといつたのは、美少年の美しさといふことを言つてゐるのです。だいたい、人間は美しいものにひかれる天性がある。それはなぜか。自分の中に缺けたもの、より完全なものを求めようといふ意識がそこに働くからです。美しいものは、とにかく美しさにおいて自分にまさつてゐるし、自分に缺けたものを備へてゐるといふわけです。そして、プラトンは結論として、愛といふものは人間が知識を求めて、正しいほんたうの眞理に達するための過程的なものだといつてゐるのです。

プラトンの場合には、エロスといふギリシアの愛の精靈、そのエロスが非常に論じられてゐます。エロスといふのは、何でも中間にゐるものです。つまり、非常に智慧のあるものと智慧のないものの中にゐるのです。そして、智慧のあるものはほとんど神のやうな智慧があるのですから、もつと智慧を求めるといふことはないわけです。智慧のないものは、自分の無知に満足してゐるからそれ以上智慧を持たうと思はない。エロスといふのは、その中間にゐて、

いつもより高いもの、より美しいもの、よりよいもの、そして眞理を求めてゐる。それが人間の心の中にひそんで、いはゆる愛が生まれるのです。たとへば、美少年といふ美しいものを見れば、その美しいものを自分が獲得したいと思ふ。そして、それを次にもつと長いこと、永遠に自分のものにしたたいと願ふわけがあります。これが愛で、そしてその愛がだんだん高い程度に進むと、初めは相手の肉體だけを欲しいと思つてゐるのが、もつと肉體以上の精神の美しさにもみな廣げてくる。そして精神の美しさにみな廣げてくれば、ほんたうに精神的に美しいもの、徳といふか、眞理といふものを求めてくるやうになる。それが人間の場合には、普通の戀愛では美しい肉體から美しい精神へで終つてしまふのですが、それをもつと永續させたいといふ氣持になるときに、それが藝術作品とか、大きな英雄的な事業とか、いろいろなものに向つていくわけがあります。

プラトンの中にディオティマといふ有名な智慧のある女友だちの言葉があるのですが、愛の奥義に到る正しい道は次のやうなものだと言つてゐます。日常の個々の美しいものから出發して、最高の美を目ざしてたえず高く上つていくことは、ちやうどはし

この階段を上るやうである。そして、一つの美しい肉體が二つの美しい肉體へ進み、二つの美しい肉體からあらゆる美しい肉體へ進み、そして、美しい肉體から美しい職業活動へ進み、美しい職業活動から美しい學問へ進み、さらに學問から出發して、つひにはほんたうの眞理、つまり美の本質を認識するまでになる。かうギリシア人は考へた、といつてもいいのです。

さうすると、これはわれわれの考へる戀愛とは違ふので、男が女を愛し、女が男を愛することと、われわれが學問を愛したり知識を愛したり、さうしてまた英雄的な行動に向つて進んでいくことを、みなプラトンは全然同じ動機に扱つてゐるのです。これまでヨーロッパでいろいろな哲學ができたけれども、みなもとにエロスがあると思はれる一つの理由で、日本人は昔からかうは考へてゐないので。戀愛と哲學やりつばな事業は全然別物だと思つてゐる。ことに儒教道徳がさういふ考へを非常に強くしたので、儒教道徳、武士の道徳は、戀愛などといふものは、がいして人間の精神活動の一番根本にあるものではなく、非常にいやしいものとされてきたのであります。

キリスト教がローマ時代に出てきてから、ヨーロッパですでに二十世紀もたつて、あらゆるヨーロッパの戀愛といふ概念には、キリスト教が濃くまつはりついてゐます。およそキリスト教を離れた戀愛は、ヨーロッパではほとんど考へられない。あとは肉欲だけです。キリスト教の考へた愛には、ギリシアの考へたやうな欲望は全然除かれてゐます。キリスト教が考へた愛は、肉欲を全然離れたものである。全くの精神的なもので、肉の欲望はみにくいものとして捨てられてゐる精神的な愛ですから、他人に對する愛は決して戀人に向ふばかりでなく、憎たらしい隣りに住んでゐる人とか、最も憎むべき敵とか、さういふものにも愛が及ばなければならぬ。つまり、普通の人間の動物的な欲望を全然離れたものが愛だと考へる。これがキリスト教の愛であります。もし、人間が自分の欲望だけに従つて行動すれば、うるさい隣人を愛することはできないし、また敵は憎むべき、殺すべきもので、敵を愛することなんかできない。キリスト教が、人間の理想としてかゝるがへたことは、人間が動物的な欲望からすつかり離脱することによつてしか、ほんたうの愛に向ふこ

とができないといふことです。

ところがキリスト教も、だんだん時代を經るに従つて、いろいろな形のものが出てきて、ヨーロッパの戀愛は、もともとさういふ觀念ですけれども、それにいろいろな裝飾が加はつてきたのです。これの一番中心となるものが、聖母崇拜だと思はれる。つまりキリスト崇拜でなくて、聖母崇拜です。聖母マリアといふ無原罪の受胎、全く男女の交はりをしないで子供を産んだ女性に對するキリスト教徒の愛は、あらゆる女性に對する一つの理想が、だんだんそこに固まつてくるのでして、キリスト教の戀愛には、やはりマリアへの愛が、いつも基本になつてゐる。これは、宗教にエロチシズムが、幾ら除いてもこびりついてくるといふ、一つの證據です。キリスト教の尼僧は男としてキリストを愛するやうな結果になりかねないし、またキリスト教徒の男は、いつか、女としてマリアを愛するやうになる。ですから、マリア崇拜といふものが、ヨーロッパ人の一つの戀愛の根底にあるのであります。

それが一番はつきりした形をとつたのが、騎士道であります。騎士といふものは、何も求めることのない誠實さと忠實さをもつて、自分の仕へる貴婦人

に盡さなければならぬ。そして、それには絶対の奉仕、まるで神に對するごとく、絶対の奉仕で、男たるものは、自分のまことを盡し命を捧げて戀愛する。ですから、騎士道時代の、騎士の自分の主人たる貴婦人に對する氣持は、ほとんど、マリアに對するのと同じ氣持があつたと思ひます。そして、やはりキリスト教的に欲望を離れ、しかも最高の美——美といふ言葉は、キリスト教ではきらふのですが、美しいものにまことを捧げるといふ結果が出てきたのであります。これが今でも、ヨーロッパの戀愛にはどこかにひそんでゐるので、女性に對するあこがれが、マリアに對するあこがれに歸着する、そしてマリアに對するあこがれは、自分の欲望を押しつけて、最大のまことを捧げ、時には命を捨てることもあへてするやうな戀愛であります。

これをギリシアの戀愛と比べてみると、そこにおのづからなる差があります。ギリシア人の考へ方は、人間の欲望をまづ肯定して、そして欲望をだんだん清め、高めていくところに、一つの特色を持つてゐます。ギリシアの精神は、人間は動物でもないし、神でもない。しかし同時に動物でも神でもあるから、動物としての人間を否定することはできない。ただ、

それをいかに高めていくかといふところに、理想を置いたわけがあります。ところがキリスト教は、初めから動物としての人間を否定して、それを抹殺するといふところに動機があるので、動物性は全部悪全部罪、全部悪魔のしわざであります。そして、それが浄化されるのは、ただ結婚といふ形で子孫を繁榮させる場合だけ浄化されるといふわけです。ですから、カソリックの教義は、今でも子孫の繁榮を目的としない、ほかの性的行爲は、全部正常ではないといふ解釋をとつてをります。したがつて、一度結婚したら、絶対に離婚はできません。ところが、人間の欲望は、はふつておけば結婚以外でも、いろいろな戀愛もするので、さういふものをカソリックでは、みな認めないのであります。

このやうに、非常に極端な考へ方で、普通の動物的な欲望を押へつけてゐる戀愛といふ觀念を發達させたので、それはまた一面からいふと、ヨーロッパ人は動物的欲望の強い人種だからです。日本人に比べると體格もいし、欲望も強い。それで、自分のさういふ欲望が、どこまで破壊的に働き、どこまで自分を亡ぼすかといふことに恐怖を持つてゐるときに、キリスト教が生まれたともいへる。むしろ、キ

リスト教のやうな欲望否定の宗教が、あれだけ勢力を占めたといふことの裏には、ヨーロッパ人が、それだけ動物的な本能の強い人種だといふこともいへないことはありません。

以上のやうなことから見てみますと、われわれの戀愛には、實に、日本古來の戀愛と、ヨーロッパ的な戀愛とが、ごちゃごちゃになつてゐるやうな形が見られます。あるヨーロッパかぶれの青年は、非常にマリアを崇拜するごとく、自分の戀人を崇拜する。また、ある非常に動物的な青年は、何も戀愛といふ形をとらずに、動物的な欲望だけを満足させて、そして何の罪の觀念も感じないで來てゐる。それが現状であります。

しかし、だんだんさかのぼつて考へると、日本人はヨーロッパ人に比べて、そんなに欲望の強い動物的な國民ではない。昔は肉食もしなかつたし、欲望も淡泊ですし、そして身體もヨーロッパ人のやうなものすごい體格を持つてゐるわけではない。日本では欲望をある程度解放しても、そんなに破壊的な形になるといふ危険は、おそらく感じなかつたのではないか。日本人の一番健康な戀愛らしきものが描か



れてゐるのは「萬葉集」ですが、「萬葉集」の戀といふのは、このヨーロッパ、ギリシアのやうな、哲學的背景を持つた戀愛ではありません。ただ古い民族のすなほな肉體的欲望が、日本人のやさしい心持とか、繊細な生活感情の中に溶け込んで、そこに、美しい別離の情とか、戀人に久しぶりに會つた喜びとか、さういふものが素朴に、しかし正直に述べられてゐます。

日本で、戀といふものが、だんだん一つのはつきりした形をとつてきたのは、おそらく平安朝ではないかと思ひます。日本では今に至るまで、戀愛に哲學的背景があつたことは、一度もないのです。一つの本能的な欲望が、ありのままの形で出てくるところに、戀愛は生ずる。これはギリシアに似てゐるのですが、それから先が違ふ。つまり、ギリシアのやうに、それに哲學をくつつけて、そしてそれを淨化することによつて、一つの世界觀を作るといふ考へは、日本人にはなかつた。日本人にとつて、戀愛は、本能プラス感情です。そして、日本では感情が非常に發達してきた。その感情は、決して哲學や何かの面には發達しないで、感情だけの世界で發達してきてたのです。だから、日本で戀といふ場合には、男女

の、露骨に言へば、一緒に寝たいといふ欲望です。それにいろいろな日本人の繊細な感情の美學が加はつたものが、日本の戀愛なのであります。

日本で最もドン・ジエアンの代表のやうにいはれてゐる在原業平は、「伊勢物語」といふ作品の主人公でもありますが、「伊勢物語」などといふ歌物語が生まれるについては、當時から色好みの家といふものがあつて、戀愛に對する關心が藝術に對する關心とほとんど同じものであつた。戀愛の専門家は、藝術の専門家と同じ家であつた。それが、平安朝のいろいろな女流文學や、戀愛文學のもとになるのですが、日本の歌の道も、戀愛の心を述べる、その感情を述べることに、一番重きが置かれたわけであります。それが、あらゆる小説や日記の根本的なテーマとなつたので、「源氏物語」の「もののあはれ」といふ大きな主題、この「もののあはれ」の中には、いろいろ佛教的な考へもないわけではないのですが、根本的には、日本人が戀愛をただ感情の形でだけ淨化してきた、その一つの完成した形が見られます。一方では、戀愛とは別に、英雄的事業とか、政治とか、思想、哲學、かういふものが形作られていかなければならなかつた。そして平安朝時代では、漢文